



説教要旨「その手を汚すのは誰？」

ルカによる福音書 23章 1～12節

ユダヤ人たちの最高決定機関である「最高法院」が開かれ、そこでイエス様の有罪判決が下されました。しかし最高法院のユダヤ人たちは、自分たちで刑を執行するのではなく、イエス様を縛ったままローマ総督ピラトのところに連れて行って訴え出たのです。それは、権限がないから仕方なくイエス様を引き渡しているのではなくて、むしろ積極敵に、ピラトにイエス様を殺させようとしていると言えます。

ピラトはピラトで、簡単な取り調べをただで「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」(23:4)と言って訴えを退けようとしめます。が、訴え出た祭司長たちは引き下がりません。実際に暴動を引き起こしたわけでもないイエス様を処罰する理由が無いピラトですが、ユダヤ人たち指導者たちの意向を無視することもできません。そこでイエス様がガリラヤ出身だとしたピラトは、イエス様の身柄をガリラヤの領主であるヘロデのもとへ送り、ヘロデにこの厄介な問題を押し付けようとしたのです。

一方で、ヘロデはイエス様が自分のもとに送られてきたことを喜びます。しかしそれは、噂のイエスとやらを見聞してやろうといった興味本位と、その命運が自分の手に委ねられているという支配欲が満たされたことによる喜びなのでしょう。しかし結局はヘロデも、自分でイエスを殺すのではなく、ピラトに殺させようと送り返します。そこにはもはや自分の脅威にはなり得ないという判断と、イエス様を手にかけた場合には民衆の反感を買うと言う打算があります。ピラトもヘロデも、そして最高法院のユダヤ人たちも、イエス様の死の責任を負おうとせず、互いに押し付け合っているのです。

イエス様を殺そうとする場において、誰もイエス様の死の責任を負おうとしないのです。最高法院とピラトと、ヘロデの三者三様の無責任さの中で、「この男に何の罪も見いだせない」と、イエス様の罪のなさが明らかにされています。にもかかわらず、イエス様はただ一人黙したまま、彼らの、そして私たちの罪の責任と向かい合い、引き受けて、十字架へと向かうのです。